

# 博士人材育成における異分野融合・学際連携の在り方

企画者：家島明彦（大阪大学 キャリアセンター）

：青井隼人（東京外国語大学 世界言語社会教育センター）

：石田悠貴（新潟大学 大学院教育支援機構 PhD リクルート室）

話題提供者：家島明彦（大阪大学 キャリアセンター）

：青井隼人（東京外国語大学 世界言語社会教育センター）

：石田悠貴（新潟大学 大学院教育支援機構 PhD リクルート室）

司会者：家島明彦（大阪大学 キャリアセンター）

## 1. 背景と目的

今日の研究環境と社会的要請の変化は、博士人材に対して従来の「アカデミア内研究者」の枠組みを超えた多様な可能性と期待を投げかけている。かつて博士号取得者のキャリアパスは大学教員や研究者中心であったが、近年では企業、政府機関、NGO/NPO、スタートアップ等へと広がり、社会課題解決やイノベーション創出の最前線で博士人材が活躍することが求められている。

このような背景には、科学技術の深化・複雑化に伴う学術研究自体の細分化・高度化と、それに対する社会からの総合的・横断的な知識・技能の要請がある。また、博士人材の就職先構造をみても、求人数そのものは伸びているものの、博士号を最大限に活かすようなポジションは限定的であり、博士課程教育・育成の段階で多様なキャリア観を涵養し、学際的視点を持つ力を育てる必要性が高まっている。さらに、データサイエンス、人工知能、環境・エネルギー、健康・生命科学、人文・社会組織といった研究領域横断的な課題が増えるなかで、これまで専門領域を分断していた学問区分を超える協働が不可欠になっている。

こうした現状は、博士人材自身に深い専門性と同時に、異分野理解・協働推進力・課題設定能力といったトランスファラブルな力を要求している。博士人材育成における「異分野融合・学際連携の在り方」は、単なる教育プログラムの設計に止まらず、大学と社会の構造的な連携の再設計を促す問題でもある。それは学問の境界を柔軟に越境する能力の育成を通じ、個々人の多様なキャリアパス開拓を支援することであり、日本全体の研究競争力と持続的発展に寄与する取り組みとして社会的価値を有する。

本セッションでは、こうした博士育成の現状と課題を出発点に、異分野融合・学際連携を軸とした育成の在り方を再考し、実践知を共有しながら未来志向の方向性を議論していくことを目指す。

## 2. 博士人材育成コンソーシアムについて

博士人材育成コンソーシアム（CCDP: Consortium for Career Development of Ph.D.）は、日本の国立大学を中心に連携し、博士人材育成全般に関するノウハウや支援施策を共有・協調して推進するネットワークである。2014年度の3大学による連携体制から始まり、現在では13大学が参加機関として加盟している。

コンソーシアムは、連携大学間で博士人材育成に関する経験や情報を共有することで、単独大学では実現が難しい規模の教育・支援プログラムの共同実施を可能としている。例えば、13大学合同での企業合同説明会、博士人材向けのセミナーやセッション、キャリア形成支援イベントの企画・運営、動画配信サイトを通じたオンライン教材・講義の共有など、多面的な支援活動が進められている。また、参加大学の特色ある事例紹介や、具体的な支援プログラムに関する相互学習も行われている。

このコンソーシアムの意義は、博士課程に在籍する学生や博士研究者に対して、学内だけでは完結しない「横断的な学び」や「多様なキャリア形成支援」を提供できる点にある。博士教育は従来、各大学院や専攻単位で完結してきたが、コンソーシアムを通じて全国規模で協調的・戦略的な支援が進むことで、地域的・組織的な偏在を是正し、博士人材が自らのキャリア形成に必要な情報・機会・ネットワークにアクセスしやすい環境づくりが促進されている。また、博士人材への支援を単なる就職支援にとどめず、専門性の深化と社会的要請との統合、研究者コミュニティと産業界・公的機関等との橋渡し機能を高める枠組みづくりとして位置づけている点も特徴である。

加えて、コンソーシアム内で生まれる異分野交流や共同プロジェクトは、参画各大学が有する教育資源や社会連携資源を相互に活用しながら博士人材の研究とキャリア開発の融合を目指す文化形成に寄与している。

### 3. 話題提供

本セッションでは博士人材育成コンソーシアムから3名が登壇し各自の取組事例について話題提供を行う。

#### 【話題提供1】石田悠貴（新潟大学）

#### 学内短期留学制度（マルチラボ）による博士課程学生の学際的研究促進

新潟大学では、博士課程学生の研究の融合性・学際性を高め、挑戦的かつ融合的な研究展開能力の涵養を図る取り組みとして、自身の所属研究室とは異なる学内・学外の他研究室で一定期間研究を行う学内短期留学制度（通称「マルチラボ」）を実施している。過去4年間で100件を超えるマルチラボが実施され、「医歯学系」「保健学系」「文系」「理系」といった分野をまたぐ学際的な研究事例も数多く生まれている。本発表では、これまでの事例から見えてきた特徴を学生の声を交えて紹介し、今後さらに能動的な取組を促すための工夫と課題について議論する。

#### 【話題提供2】青井隼人（東京外国語大学）

#### 異分野交流を促進する読書会の事例報告

東京外国語大学多文化共創イノベーションリーダー育成プログラムでは、不定期に読書会を開催している。読書会には、[A]プログラム生を対象としたゼミ形式での講読、[B]プログラム生による自主勉強会、[C]プログラムを越えた参加者を含むワークショップ型の3形態があり、それぞれの場面で異分野交流が生まれている。本を媒介とすることで、(1)本の紹介が糸口となり対話を始めやすい、(2)抽象的・本質的なテーマについても考えを深めやすい、(3)著者の意見を引用・要約することで自身の意見や感情を表出しやすい、といった効果が期待される。本発表では、これら3つの読書会の実践を紹介し、本を媒介とした異分野対話の可能性について議論する。

#### 【話題提供3】家島明彦（大阪大学）

#### 若手研究者のキャリアを支えるメンター制度

大阪大学産業科学研究所では、若手研究者（教員・研究員）を対象としたメンター制度を導入し、メンター―メンティ間の対話を通じて、キャリア形成、課題解決、研究遂行能力の向上を支援している。本制度は、専門的能力とトランスファラブルスキルの両面から助言・情報提供を行い、メンティの自発的・自律的な目標達成を促す仕組みとして設計されている。本発表では、メンター制度の理念、制度設計、期待される効果、および当該制度が博士人材育成に与えるインパクトについて報告する。

### 4. 当日のタイムスケジュール（案）

15:00-15:30（30分）企画趣旨説明、自己紹介

15:30-15:50（20分）話題提供1（石田）

15:50-16:10（20分）話題提供2（青井）

16:10-16:30（20分）話題提供3（家島）

16:30-16:40（10分）休憩（質疑確認準備）

16:40-17:20（40分）質疑応答・全体討論

17:20-17:30（10分）総括

### 5. 今後の展望

博士人材育成における異分野融合・学際連携は、単なる教育イノベーションの一領域ではなく、日本の研究力強化、社会イノベーション創出、グローバルおよびローカルな課題対応力の源泉として位置づけられるべきである。セッションで提示された事例から、学際的協働は制度設計のみならず、文化的土壌や評価制度、研究環境全体の柔軟性を前提として成立していることが示された。

博士人材が多様なキャリアパスを描くためには、専門領域を柔軟に越境する機会、異分野知識との出会いの場、キャリア支援ネットワークの構築が不可欠である。大学・研究機関は、これらを単発的な施策としてではなく、戦略的かつ継続的な支援体系として整備する必要がある。また、博士人材育成コンソーシアムのような連携組織は、異分野連携の推進力となるだけでなく、教育・研究支援の標準化、相互補完的な資源共有、さらには学際的ネットワークの持続性を担保するプラットフォームとして重要な役割を果たす。コンソーシアムメンバー間の情報交換や合同イベントは、博士人材の視野を国際・学際・実務の各段階で拡張する契機となりうる。

一方で、課題も存在する。学際的協働は、評価基準や報酬制度と必ずしも整合しない場合があるほか、専門領域の境界を越えるコミュニケーションの難しさ、制度面での柔軟性の不足、教員・学生双方の時間的制約といったハードルも指摘されている。これらを乗り越えるためには、評価制度の再設計、異分野連携を促進する研究インフラの整備、人的ネットワーク形成支援、キャリア教育およびメンタリングの体系化が求められる。さらに、産官学連携や国際共同プログラムの推進も、学際的視野を広げる重要な鍵となる。

本セッションが、参加者と発表者双方にとって有意義な知見交換の場となるとともに、各大学・研究機関において実践可能な学際連携・異分野融合施策のアイデア創発につながることを期待したい。博士人材育成は大学教育の未来そのものであり、個別最適と全体最適のバランスのもと、多様な才能が共創する場を社会と共有していくことこそが、今後の重要な課題である。